

西洋史特講「聖テオドシア教会」（井上）別紙資料

資料 1、『聖テオドシア伝（コンスタンティノーブル教会暦、7月18日）』

同じ日に（7月18日）聖なる殉教者テオドシアの殉教を追悼する。彼女はテオドシウス（3世）の時代に神に守られた女王の町（コンスタンティノーブル）で、敬虔な両親のもとに生まれ、育った。彼女が7歳の時に父は死に、彼女は母が彼女を、コンスタンティノーブルのある修道院で修道女にした。

それから母も死に、すべての財産はテオドシアに残された。キリストのイコン（3）、聖母のイコン、殉教者アナスタシアのイコンをゆだねた後、彼女は残りのすべての相続財産を貧民と孤児に配った。

しばらくして、不敬虔なレオンがテオドシオスを廃位し、帝国の支配者となった。ただちにこの邪悪な男はゲルマノス、偉大な総主教を棍棒と刀でもって、総主教座から去らせた。ゲルマノスがレオンの神に反する命令に従うことを拒否したからである。それからレオンは、我らの神キリストの聖なるイコンを取り除き、燃やすことを急いだ。このイコンのゆえに聖なるカルケー門と呼ばれている門の上に飾られているイコンである。皇帝の命令が実行に移され、スパタリオスが梯子に登って斧で聖なるイコンを叩き落そうとした時、淨福のテオドシアは、他の敬虔な女性たちとともに、梯子をつかみ、スパタリオスを地面に落として、死なせた。彼女たちはそれから総主教座に向かい、陰謀の首謀者である不敬虔なアナスタシオス（新総主教）に石を投げた。その結果、テオドシア以外の女性たちはその場で首を切られた。しかし聖なる女性テオドシアは、野蛮で非人間的な公の処刑人に捕らえられた。彼らはテオドシアを牛の広場まで引きずって行き、角で彼女を殺した。このように良き戦いをしたのち、女性たちはその魂を神の手にゆだねた。

テオドシアの追悼法事は救世主キリストの聖なる Evergetis 修道院で祝われる。

資料2、野中恵子・大村次郷『イスタンブール歴史の旅』（2002年、小学館）

赤い薔薇が散ったミサ

——ギュル（薔薇）・モスク（旧ハギア・テオドシア教会）

ここは金角湾のほとり。湾の出口の波止場町エミノニュから半時間ほど、新市街を右手に湾沿いを歩いてきた。コンスタンティノープル時代はこの道を、城壁が延々とつづいていた。さわやかな疲労感を、歴史のロマンと水の眺めがいやしてくれる。

このアヤカプ地区には、今も残る城門が二つ並んでいる。ここから先は教会やシナゴグ（ユダヤ教会）が多く、現代イスタンブールの中に過ぎ去りし時代の残影を感じさせる。ギリシャ正教のイスタンブール世界総主教座も、すぐ先である。

城門の一つをくぐると、私が探すコンスタンティノープル時代の語りべが待っていた。ギュル（薔薇）・モスクである。昔の名前はハギア・テオドシア（聖テオドシア）教会といった。

スルタン・アフメット地区とはうって代わった静けさの中、ギュル・モスクは素朴な気品をたたえ、湾のほとりに一人たたずむ。もとは城郭だった高台にあるので、下からみると、ややほっそり見える。胴体はうねるような丸みを帯び、きめ細やかに積み重なった赤煉瓦が繊細な模様を描き出しており、その名のとおり一輪の赤い薔薇のようだ。

私はここに、テオドシアという女性の面影を訪ねにきた。美しくもはかなく散った、真紅の薔薇そのものの人生を送った聖女である。ビザンツ帝国に、最初のイコノクラスム（聖像破壊運動）が吹き荒れた八世紀のこと。大宮殿のハルケ門を飾っていたイエスのモザイク画が、狂信的な群衆に引きずり下ろされ、壊されようとしていた。そのとき、身を投げうって絵を守ろうとしたテオドシアは、彼らになぶり殺しにされてしまった。殉教したテオドシアはキリスト教の聖人に加えられ、彼女を奉ってこの教会が建てられた。そしていつしか教会は、「色褪せぬ薔薇」とたとえられるようになったのである。命尽きても魂は永遠に燃え続ける、テオドシアの強さを表しているのだろうか。

教会の暦では、聖女テオドシアを祝福する日は五月二九日だった。そして運命のコンスタンティノープルが征服された日も、ぐうぜんにも五月二九日の未明だったのである。ハギア・ソフィアと同じように前日から、信者たちは薔薇の花を持ってハギア・テオドシアに集まっていた。オスマン軍がいよいよ城壁を破ってくる予感が刻々と迫る中、神にすがる祈りは夜通しつづく。ほんとうなら明日の朝、テオドシアを祝福する特別ミサが行われるはずなのである。でも、ハギア・テオドシアにその夜明けは、もうめぐってくることはなかった。

まもなく街のいたるところはオスマン軍によって制圧され、ハギア・テオドシアにもオスマン軍の兵士がやってきた。そして彼らは中に入るや、はっと息を飲んで立ちすくしたという。聖堂の中はいちめん、散り散りになった薔薇の花で埋めつくされていた。

最後の一瞬まで美意識を捨てず、みごとに散り果てたビザンツ人たち。そのプライドに思わず敬意を表したくなる。最後のミサにここを選んだ彼らに、命を犠牲にして信念を貫きとおしたテオドシアが道を示したのだろうか。やわらかで可憐なイメージなのに、気高い強さを秘めた教会に会え、私は自分も勇気づけられた気になった。

資料3、ニケフォロス『簡略歴史』第60章

60. The emperor, it is said, when he had heard of these things, considered them to be signs of divine wrath and was pondering what cause might have brought them about. On this account he took up a position contrary to the true faith and planned the removal of the holy icons, mistakenly believing that the portent had occurred because they were set up and adored. He tried to expound his own doctrine to the people, while many men lamented the insult done to the Church, for this reason the inhabitants of Hellas and the Cyclades, disapproving as they did of this impiety, rebelled against the emperor and, after collecting a great fleet, made a certain Kosmas their emperor. And so they came to the Imperial City. The men of Constantinople joined battle with them and set fire to many of their ships. Beholding their defeat, they went over to the emperor. One of their commanders, called Agallianos, when he had seen these things, despaired of his salvation and cast himself in the deep in the armor (he was wearing). Kosmas and another man called Stephen were arrested and beheaded.

資料4、テオファネス『年代記』6218年（西暦725／6年）の条

（前略）

Thinking that God's wrath was in his favour instead of being directed against him, he stirred up a more ruthless war on the holy and venerable icons, having as his ally the renegade Beser who rivalled his own senselessness, for both of them were filled with boorishness and complete ignorance, the cause of most evils. The populace of the Imperial City were much distressed by the new-fangled doctrines and meditated an assault upon him. They also killed a few of the emperor's men who had taken down the Lord's image that was above the great Bronze Gate, with the result that many of them were punished in the cause of the true faith by mutilation, lashes, banishment, and fines, especially those who were prominent by birth and culture. This led to the extinction of schools and of the pious education that had lasted from St Constantine the Great until our days, but was destroyed, along with many other good things, by this Saracen-minded Leo.

At this juncture the inhabitants of Hellas and the Cyclades, moved by divine zeal, came to an accord and revolted against him with a great fleet, bringing in their train a certain Kosmas who was to be crowned emperor. The expedition was commanded by Agallianos, turmarch of the Helladics, and Stephen. They approached the Imperial City on 18 April of the ioth indication and, after joining battle with the people of Byzantium, had their ships burnt with artificial fire and were defeated. Some of them were drowned by the Hollow, among them Agallianos, who threw himself in the sea armed as he was, while the survivors deserted to the emperor. Kosmas and Stephen were beheaded. As for the impious Leo and his supporters, they grew in wickedness as they intensified the persecution of the true faith.

（後略）

資料5、ロシア人巡礼の記録（1200年）

ある女子修道院に聖テオドシアの聖遺物が、蓋なしの銀の聖遺物箱のなかにある。人々は行列にこの聖遺物を持ち出し、それを病人にかざす。そうすると病人は癒やされるのである。

資料6、パキュメレス『歴史』アンドロニコス・パライオロゴス5巻32章の要約

その頃、コンスタンティノープルに耳も口も不自由な男がいた。彼は親切な金持ちたちの仕事をして生活していた。彼が聖使徒教会の近くに住むペゴニテスという人物に雇われていた時、ある夜夢に聖テオドシアが現れた。夢のテオドシアは、彼に蝋燭と香をもって、彼女の教会に行くよう告げた。翌朝、この耳と口が不自由な男は、自分に告げられたことをまわりの者たちに身振りで教えた。そして彼らとともに言われた教会へと行った。教会で、彼はテオドシアのイコンの前でランプの聖なる油を塗られ、長いあいだ彼女の足元にひれ伏して、殉教者テオドシアに祈った。その時には何も生じなかった。しかし、帰り道に彼は耳が痛いのに気づいた。そして痛い耳を指でこすると、耳から小さな羽根のある生き物が飛び出し、飛んで行って見えなくなった。不思議なことに驚いたものの、耳の状態は変わらないまま、彼は自分が雇われている家に戻り、パンを焼くための火をおこし始めた。しかし火は燃え上がらず、燻るばかりであった。いくらやってもだめなので、彼は怒り、呪いの叫び声を挙げた。彼はかまどを呪い、燃えない火を呪った。当然ながら、その声に家の者たちが気づいた。彼らは、その男が声を出したことが信じられず、声は火の中から出たものと思った。ところが彼らがそのように言っているのを、耳の不自由な男が聞いて、彼らが聞いた声は間違いなく自分の声だと言った。聖テオドシアが彼の耳を開き、舌を緩めたのだと悟った人々は、この出来事をすべての人々に知らせた。この奇蹟は皇帝（アンドロニコス2世、在位1282～1328年）にも伝わった。皇帝はこの男を呼び寄せ、詳しく尋ねた。男がみずからの口で詳しく語ったので、皇帝はたいそう感激し、みずから聖テオドシア教会に行くことにした。皇帝は総主教や元老院議員たちとともに、裸足で聖テオドシア教会に行き、祈りと感謝のなか一晚を教会で過ごした。

資料7、ノヴゴロドのステファンの巡礼記（1348-49年）

それから私たちは街に戻って、処女テオドシアにちなんで名づけられた海岸近くの修道院に行き、そこでテオドシアの遺体に口づけをした。とてもすばらしい修道院で、毎週水曜日と金曜日はお祭りが行なわれているようであった。多くの男女が蝋燭、油、香油を持ってくる。さまざまの病に苦しむ多くの病人がそこでベッドに横たわり、治療を受け、教会に入る。他の者たちも連れてこられ、一度に彼女の遺体の前に置かれる。聖テオドシアがとりなしをして、病人は癒される。コーラス隊が朝から九の刻まで歌い続け、ミサは夕方遅くになってから行なわれる。

資料8、匿名のロシア人巡礼の記録（1390年頃？、1424年？）

そこ（聖コスマス・ダミアヌス修道院）から聖テオドシアに向かう。そこには聖テオドシアの修道院がある。彼女の遺体が収められている。月曜、水曜、金曜には彼らは聖テオドシア（の遺体）を運び、病人の上に載せる。すると彼女から癒しがやってくる。

資料9、ドゥーカス『歴史』第39章23節

都が陥落したそのおぞましい日は、聖なる殉教者テオドシアの祭日であった。とても人気のあるお祭りで、その夜には多くの男女が聖人（テオドシア）の募室で一晩中眠らずに祈りをするのである。朝になって、多くの女性たちが夫とともに、テオドシアの教会で聖人を讃えようと出かけた時、彼らは突然トルコ人のわなに陥った。……

資料10、ドゥーカス『歴史』第39章18節

なぜ彼ら（都の住民たち）がそろって大教会（聖ソフィア教会）に逃げ込んだのであろうか。何年も前に偽予言者の言葉を聞いていたからである。その予言は、コンスタンティノープルは大軍を率いて侵入するトルコ人によって征服され、ローマ人（＝ビザンツ人）は切り倒されて、コンスタンティヌス大帝の円柱まで追いつめられるだろう。ところがその時になって、剣を手にした天使が降りてきて、円柱の前に立っている粗末ななりの貧しい男に剣を渡して言うだろう。『この剣を取れ、そして主の民の復讐をせよ。』するとトルコ人は逃げ出し、ローマ人はそのあとを追って彼らを打ち倒すであろう。この町や西方から、さらにはペルシア国境に至るまでの東方からトルコ人を追い払うであろう。……………以上が、彼らが大教会に逃げ込んだ理由である。

参考文献一覧

- (1) 野中恵子・大村次郷『イスタンブール歴史の旅』、小学館、2002年
- (2) 井上浩一・栗生澤猛夫『ビザンツとスラヴ』世界の歴史11、中央公論社、1998年
- (3) *Byzantine Defenders of Images: Eight Saints' Lives in English Translation*, ed., A. -M. Talbot, Washington D. C., 1998.
- (4) A. -M. Talbot, "Old Wine in New Bottles: The Rewriting of Saints' Lives in the Palaeologan Period," *Twilight of Byzantium*, ed., S. Curcic and D. Mouriki, Princeton, NJ, 1991, pp. 15-26.
- (5) Idem., "Healing Shrines in Late Byzantine Constantinople," *The Constantinople and Its Legacy 'Lecture Series*, Toronto, 2000, pp.1-24.
- (6) J. Guillard, "Aux origines de l'iconoclasme: le temoignage de Gregoire II," *Travaux et Memoires*, 3, 1968, pp.243-307.
- (7) T. F. Mathews, *The Byzantine Churches of Constantinople: A Photographic Survey*, University Park and London, 1976.
- (8) G. P. Majeska, *Russian Travelers to Constantinople in the Fourteenth and Fifteenth Centuries*, Washington D. C., 1989.
- (9) A. van Millingen, *Byzantine Churches in Constantinople: Their History and Architecture*, London, 1912 (rep. 1974).